

天の根に謳う

1.

本を読みながらそつと奥の机を窺う。図書室特有の紙とインクの臭いにまどろむ人間が数人いて、その奥に少し退屈そうにしているオリビエがいた。

「もうこの本、全部読んでしまったのだがね」

その場にいた数人がいぶかしげな表情をする。それもそのはず、帝国大使館に集められている本はそれなりの冊数があり、根をつめてこもつていれば全部読める、という量ではない。結局大使館員には普段の行いもあり、オリビエの言葉は話半分に受け止められていた。

だがミュラーは正味、この書架全て読み通したのだろうと思っている。今よりもつとつと幼い頃、オリビエ専用の図書館の本を瞬く間に読破していったのを間近で見ているせいだ。

「退屈なのは仕方がないが、外に出られてしまうと非常に問題になる」

自分を明かして以来ダヴィルが懇願した。お願いだからこれ以上、帝国と王国の間に火種になりかねないものを撒き散らさないでくれと。国境付近で大炎上しそうだったのは記憶に新しい。王家から公式発表があり脅威ではないことは明らかにされようとも、それを素直に信じるほど王国は十年前から立ち直りきつていないのだから。

「もう少しで帰国だ。その準備も終わるのだろうか？ 帰国してからは退屈などはいえないのだから、今の内に暇を謳歌している」

机の上でだらける様子に溜息をつきながらオリビエの傍に行くミュラー。

「謳歌中だよー。キミこそそんなしかめつ面してないでさ。戻ったらもう二度と笑顔になれないかもしれないんだから、ほらほら笑って笑って」

ぴよこんと起き上がって嬉しそうな顔をする。この表情はよく知っていた。

「あれ？ どうかした？」

黙つて半目で佇む男を覗き込んでくる。ちらりとその様子を見て溜息をついた。

「からかうのはほどほどにしろ」

「あ、ばれた？」

「……ばれないかと思つたのか貴様は……」

机から降りると、オリビエの体を押しやる。だがその手か

ら逃げるようにミュラーに近寄ってくる。傍から見れば何をやっていのかさっぱりわからないだろうなど妙に冷静に考えた。

「いい加減にしないか。他の閲覧者に迷惑だ」

「あ、そだね」

言われて初めて気がついたというように机から降りた。その様子に若干不安を覚える。

「貴様……気が緩んでいないか？」

「なんでさ。ボクはいつもと変わらないつもりだけど？」
意外なことを言われたと少し語気が強くなる。

「今この場にいるほかの閲覧者に対する気配りが欠けていた」

耳元で鋭く囁けば一瞬目を開いて黙った。ミュラーや、他によく知る面々相手にも最低限の気配りをする男である。偶々今、この場に同席しているだけの人間に対して普段ならどれだけの神経を使っているか。それを知るだけに、不用意に机にのぼって他の面々に迷惑をかけることが不安だった。

「暇だね。謳歌するのも段々あきてきたよ」

話題を変えながら書架の前に立つ。黙ってミュラーは後を追う。

「そろそろ入れ替えを進言してみるか」

「では今ここにある本はどうする気だ。貴様のせいで帝国では発禁処分の本まで混じっている。本国に持ち帰れば即座に

焚書だぞ」

「そこはそれ、どうにかなるよ。だってこの国には知り合いが多いし。いざとなればクローゼ君に頼めばどうにかしてくれそうだ」

「あまりくだらない事で手を煩わせることはやめてくれ……」

「気にしないとと思うけどな、彼女なら」

「……」

これ以上言っても自分ではオリビエをやり込めることは難しい。稀に成功することもあるが、今後のことを考えるとこんな瑣末なことで自分の運を使ってしまうのも嫌だ。言葉を飲み込んでオリビエの後をついて回った。

どうやらオリビエ以外にも無断で書架に本を入れる輩がいるようで、ミュラーが見たことがない本が数冊あった。オリビエも同様だったようで、ものめずらしそうに手にとっては戻している。

「これなら問題もないか」

ついて回るほどでもなかるうと、先ほど葉を挟んでおいた本のところへ戻った。

「あれ……なんだろこれ」

ページを繰る音。ややあつてから自分に近寄ってくる足音。一体今度は何を見つけたのだろうかとう覚悟をしながらも、呼びかけられるまではそちらを向かないことにしている。

「ねえミユラー、これって何だと思う？」

「は？」

振り向いた眼前に差し出された古い本。

「酷く古そうだが……それでもいい装丁だな」

「いや、そこじゃなくて」

もどかしいオリビエが指差したのはとあるページに描かれている絵。しばらくみつめてはいたが肩を疎めた。

「残念ながら貴様がわからんものが俺にわかるわけがない。その絵がどうかしたのか？」

「いや、なんだろうなーって思ってた。箱に……糸が張っているのかな」

「説明文くらいあるだろう」

「読めないんだ」

「何？ 近隣の言語は一通り習ったはずだが」

覗きこむと確かに読めない。が、どこかで見たとような文字。

「こんな本誰が持ち込んだのだ……」

「まあまあいいじゃない。雑多こそが帝国を象徴してると思うから」

「何のことだか。……おい、その本をどうする気だ？」

「暇つぶしにもってこいじゃないか。幸い王都には大きい図書館も博物館もある。どこかに解説できる人がいるかもしれない」

「ちよつと待て！ 外出は……」

「なんならキミも来ればいいんだよ。あ、ちゃんと着替えるように。軍装じゃすぐ人の目に付く」

「うっ……」

釈然としない部分もあつたがオリビエに従うことにした。

大使に懇願されて館内に留まっているが、現状で彼に待機を命じられる人間は大使館にいない。それにより、ミユラー自身も暇を感じていたのは確かだった。